

しあわせ

12 月 号



ほんのうまなこ
 煩惱眼を障えて見たてまつることあ
 たわずといえども、大悲倦むことなく
 だいひう
 して常にわが身を照らしたまふ。

(源信僧都『往生要集』)

「手を合わす母」

「新型コロナウイルスに翻弄された一年となった今年も早や、師走。せつかくのオリンピック、パラリンピックもコロナに振り回されて選手には気の毒だった。一生一度の晴れ舞台が無観客になってしまったのはいかにも残念だったろう。ワクチン接種が進み、急速に感染者が減少したことは有難いことであったが、罹患して亡くなった方後遺症に苦しむ方、まだまだ苦悩は続く。とにもかくにも歴史に残る一年となったが、新しい年に向かって歩を進めねばならない。何がどうなるうとも、今日一日一日を両手合わせて「おかげさま、ありがとう」と言える身となつてこそ、人間に生まれた甲斐のある人生だ。そんな人生が私の生き様から出てくるはずがない。阿弥陀様の御手に包まれて生きる人生にこそ開かれてくる。後生の一大事ある。」

法座案内

報恩講法要

十二月 十二日(日) 昼席

十三日(月) 朝席・昼席

講師 内藤 知康和上

(本願寺派勧学)

法味の会「仏法珠玉のことば」

十二月 十七日(金) 午前十時

お話し 住職

※本堂内は常時換気しておりますが、参拝の際は、検温・マスク着用をお願い致します。

府中町山田二丁目一五十三
 栢原山 龍仙寺
 電話(〇八二二八)一四八二



あれ？どこ置いたか知らない？はずしたマ
スクを探していると、「アゴにかかっています
よ」と坊守が教えてくれました。わたしのま
なざしはいつも外へ外へと向っており、いち
ばん身近なものほど遇いがたいようです。今
月は、そのようなわたしのまなざしとは矢印
の向きがひっくり返っている源信僧都（げん
しんそうず）の法語を味わってみましょう。

九四二年、平安時代の中頃に生まれられた
源信僧都は、慈愛にみちたお母さんの願いに
よって、わずか九つで比叡山へのぼり、四十
三才のとき、のちに日本浄土教の礎となった
『往生要集』を著されました。この書物は、
じつに百十二部もの経典や論書から、六一二
文にもものぼる膨大な引用をしつつ、そのすべ
てを念仏の行に集約された書物です。漢文で
八万五千字をこえる大作ですが、平安時代は
たいへんよく読まれたようであり、紫式部な
ども、ほほ暗記していたともいわれます。

ただし『往生要集』は、あくまでも比叡山
の僧侶としての源信僧都が著されたものであ
り、そこに説かれている念仏は、基本的には
比叡山の念仏であり、のちに親鸞さまが説か
れた他力の念仏とは違います。それは身も口
も心も全集中して仏さまを念ずることで、煩
悩を断ち、仏のさとのり境界をまのあたりに
する。仏を見る。ための修行でした。

仏さまを見る行といえ、比叡山には好相
行（こうそうぎょう）という行があります。
これは毎日、三千もの仏さまの名を唱えつつ、
三千回の五体投地をくりかえす行です。くる
日もくる日も、不眠・不休で三千回の五体投
地をくりかえし、仏さまを見るまで行は終ら
ないそうです。宮本祖豊といわれる行者さん
は、二度のドクターストップをはさみながら、
なんと五八五日、あしかけ三年にわたって修
行をつづけ、ようやく仏さまを見ることがで
きたそうです。まさしく命がけでの行ですね。

源信僧都の『往生要集』も、基本的には、
煩惱を断つて、仏を見る。ための念仏の行が
説かれています。しかし、その一番中心とな
るところで、僧都のまなざしは、不思議にも
その矢印がひっくり返っていました。

煩惱ぼんのうまなこ眼まなこを障さやえて見たてまつることあたわ
ずといえども、大悲だいひつ倦ひうむことなくして常に
わが身を照らしたまふ。 （往生要集）

わたしは煩惱に覆われて仏さまを見ることは
できないが、阿弥陀さまはけっして見放すこ
となく見つめつづけてくださっている…。そ
れは八万字をこえる大著のなかの、わずか十
数文字にすぎません。しかし、見えないこと
を苦にするのではなく、仏さまが見通してく
ださっていることを喜ぶ、このまなざしの逆
転にこそ僧都の念仏はきわまっています。
そしてこの矢印の逆転が、親鸞聖人の他力の
念仏へと伝わっていったのです。

「副住職さん、赤ちゃん生まれてよかったね
え。お父さんも、よろこんどってじゃろ。」
六年前、長女が生まれたときに、あるご門徒
さんに声をかけていただきました。
「有り難うございます。はい、さすがに父も
可愛いようで、わたしが四十年間、見たこと
のないような優しい顔をしてあやしています。」
幼いころからきびしいイメージの父だったの
で、笑い話半分、本気半分でそうお答えした
のですが、ご門徒さんはこう仰いました。
「あなたが覚えとらんだけよのう」
四十年ごしの親のまなざしに、ふと遇わせて
いただいた忘れられない言葉です。
いつも外へ外へと向かっているわたしのま
なざしが、ふとひっくり返るときがあります。
おなじように、見えないことを苦にするので
はなく、仏さまが見通してくださっているこ
とを慶ばせていただく、それが真宗のお念仏
なのです。ともにお念仏いただきますよ。